

再録 竹中工務店『approach』 1965年春号 所収

## 特集 学校建築 関西大学を中心に 村野藤吾氏にきく

川添 登

解説 橋寺 知子

編集部 きょうは関西大学を中心に、かねて村野先生が考えていらつしやる学校建築のことを……。それを通じて、先生のお考えを、浮彫りにしていただく、こういうことをお願いします。(川添氏に) きょうごらんいただいた関西大学の、フレッシュな印象を一つ……。

川添 きょう初めて関西大学を拝見して、それぞれの種類の建物がそれぞれ個性を持って入ってる。たとえば図書館が丸いとか、工学部関係はいかにも工学部の感じ……。そういうようなことで非常におもしろく拝見させていただいたんですが。

村野 どうも恐縮です。

川添 で、学校……。とくに大学を設計される場合先生が一番中心にされてるところですね。それをまずお聞きしたいのですが……。

村野 きつとそういう質問が出るだろうと思っただですけど……。わたしはね、大体学校をやる理想には——まあ教育方面のことはわたくしよく存じませんが、建物の学生に与える影響力っていいですか、わたくしはわたくしなりに考えてやってるわけです。……少し夢があるわけですね。

川添 大学における戸外の空間、それを先生はどのようにお考えになっていらつしやるか。早稲田と関西大学を比較しますと、早稲田の場合には広場があつて、研究室が高層で立っていて、シンボリックな表現ですね。それに対して関西大学は展開して、いまはやりの言葉でいうと外部空間と言うんですか、それから広場でなくて流れというか、道というのかそういう感じで……。その対照を大変おもしろく拝見したんですがね。

村野 わたしが関西大学の建築を引き受けたときは、全く、それが総合的には考えられない状態にあつたわけです。というのは、敷地の買収だとか何かで、ここのとこを買収して、こう埋めてこうだと、こういう状態なんですがね。……大体の見当はつけてみてもいくつか自然発生的な状態であればまとめられている。やわらかな所もある。まとまっている所もある。その中でいくらか、まあ外部空間の整理というものを考えていかないかん。

川添 とくに総合大学になるとひとつの都市みたいなものでございませうからね。

村野 そうですね。

川添 ひとつの都市計画の型をシンボライズして小さくやる。それでいろいろ都市計画を考えるのに非常に参考になるものじゃないか、大衆というものはそういうふうに見えるんです。関西大学の場合、継ぎ足し継ぎ足しやったということですが、都市計画というのはそういう状態が多いわけですね。一ぺんに大きな計画をどかんとやることはなかなかむずかしくて、次々とやっていく、そういう中でちよつとした心づかいというのが意外に生きている。たとえばきょう拝見して暗示を受けたああいう道がこう横へテラスみたいにつけてあったり、それから、建物と建物の間の空間とか抜け道とか、そういうとこに何か楽しさがある。そういう露地のおもしろさというんですか、いろいろ参考になるところを拝見したんですけれども。

村野 それもね、言われてわたしの方がむしろ気がつくぐらいですがね、関西大学の場合だけのことを申し上げて、一般的にならないと思いますけど本来ならば敷地がちゃんと確保されていると、プランクをこさえてワクをやっていく、いまの運動場は、いずれあそこにセンターみたいなものが出来ると思うんですよ。その周辺に建てるというのが大体の行き方の方ですね、だから、部分的に、そのブロック内で考えていく、今のところこれより仕方ないでしょうね。建物の建築は長期間にわたってやるのですから、総合的に考えられない事情もあるのですよ。

川添 作業所主任の方に案内していただいたんですけど、講堂（誠之館特別講堂）はほんとは山のほうから入るはずだったのが、こっちから入るようになったという話を聞いたんですが、そういうことではいるん

困難がおりになったという……今のお話でよくわかったんですがね。それから、工学部は工学部で、法文系は法文系で、統一されているのは、先生が一番好ましいと思われた様式をとられたのか、それとも工学部はこういうスタイルがよろしい、文学部はこういうスタイルと。村野 工費の点その他勘案して……工費というのは非常に影響しますね。川添 わりあい校舎がカチツとした……というように変わですけど。図書館とか講堂、体育館とか、どっちかというファンタジックな感じで、ある意味では奔放的なやり方がとられておりますね。まあ考え方によっては図書館も校舎と同じようなスタイルでもいいんじゃないかという考え方も……。

村野 こんど出来た専門図書館？

川添 前のも、両方とも。

村野 前の千里山図書館は、プランとして、角でなくて丸の方がいいと思つてやったんですが。今度の、専門図書館で丸を使ったのは、前にこだわったわけじゃなくて、最初角のプランが出たのですが、どの方向に向けて建てるかということで各学部から、こちらに向けていやこちらといろいろ要求などあつたりして、方向性ははっきりしたものはおさまりがよくないということになったんです。それとも一つ、今度のは記念図書館と称したところですね。それでいくらか他のスタイルと変えよう、別なものにしようというのがわたしの考えだった。上のほうは——あそこでやってみるとわかりますがね、丸のほうがおさまりがいい。角にすると広場が狭くなる。

川添 角だと広場が狭くなるとおっしゃったんですが、あれは吊る構造で、一種のピロティですね。

村野 そうですね、ピロティ……。広場を広くしなければならぬですね。そういう点、見通しがきくと、それがいいというので下をあけたんです。下の建物を角にしなかったのは、丸のほうが光線の当たりぐあいがいい。下の方を明けて学生がそこで休むというふうなことですね。

編集部 第一学舎の横の、研究室ですか、スカンジナビア調で非常に階高を詰めた、あれは……。

村野 あれは自分としては……。村野の持ち味って……今井さん（今井兼次氏）だったかね、「あれはあなたのとおりです」と。あれだけですよ。他はみなその場所へ自分が努力してやるだけの話で。

編集部 あれと、最初にやった教授のクラブ室みたいなもの（大学ホール）、煉瓦が積んであること、これは早稲田の文学部と一脈相通ずるんですがああいうところが本来の先生の……。

村野 あれが一番初期の……大学院というものがどこの大学でもわからない時代にこしらえた時のなんですよ。赤煉瓦を積んで吹きつけ仕上の建物。

編集部 ブロックがまた非常にしっとりしてましてね。いい環境だと思えます。円型の図書館（千里山図書館）の時分には、先生がメキシコへいらしたあとでね、その影響が……。そんな感じをうけるのですけど。

村野 あるでしょう、その影響は。しかし、初期で一番好きなのは、一番最初にやった第一学舎。上の方で窓が大きくなっているでしょ。大きな窓。ドイツの大学を……。どこかの大学を頭に描いている――

あれと大学院の初期の建物（大学ホール）がわたしは一番自分じゃ好きなんです。あとは何かその時代の影響を受けて……。ほんとうはあの時の様には行っていないと思います。

川添 大学ホールへお伺いしましたら、作業所主任の久保さんが「村野先生が一番好きなのはあの建物です」って。

村野 そうです。

川添 いつも先生がそうおっしゃると。それでとくに気をつけて拝見させていたいただきます。

村野 いやどうも。

川添 あその壁の角に鳥が止っておりますね。

村野 ええ、ああいう遊びがね……。いまはああいうことはやらんでしようけど。

川添 それが何か愛情を感じさせますね。それからアプローチのちょっとしたのが大変楽しくて。

村野 そうですか、ありがとうございます。

川添 それから講堂（誠之館特別講堂）。コンクリートの城みたいな……。

村野 あれはね、村野でもこういことができるんだ、というのでやったんですよ。ちょっと私の余興ですが。できは悪くとも……。少しアンビシャスといえますかね……。

編集部 レパトリーの一つですね。

川添 村野先生のレパトリーが広いということは建築界周知の事実なんですけど、レパトリーの中からほかならぬあのかたちを、講堂に使ったということですね。どういうイメージで……。山とかいろんな条件ございましょうけど。

村野 あれは斜面を利用したこと、それからこれはイメージだから理屈にならないですけど、とにかくああいう夢なんです。こういうふうな、（手を横にして）たいらに、梁を長手の方にかけてただけなんです。

す。前後の壁でそれを受けてるでしょ。普通のやり方です。両方の側壁を遊ばして自由にかたちづくる。それともう一つ、ああいう荒っぽい形にしたのは、その時ブルドーザでひっくり返してこういうふうな感じを描いて）でこぼこになっていました。砂漠の中に建ってる様

かし、いまの様になるとその時のなにと合わなくなる。

川添 ブルドーザでひっくりかえした場所に、コンクリートのかたまり、ということだと思いますが、誠之館ですか、学生ホール。あれの階段降りたところに、モルタルで岩みたいにしてありますね。たまたま、学生ホールのすぐ隣りに、工事現場があるので工事のセメントの残りかと思つたらそうじゃない。デザインされているんですね。村野 それはほかでも……第一学舎研究室の入り口にもある。誠之館の方のは出来が悪いことも悪いんですけど、ああいうコンクリートで石をつくってやろうと思つたんですよ。あそこは直線ばかりでしょ。何か自然のものをに入れてやろうと。

川添 コンクリートは賛成ですけど、学生さんが降りてくる……あそこはちよつと突つかかる。もう少し小さいとか、かたちを考えた方が。村野 あれは未完成なんです。コンクリートで岩が出来るわけじゃないけれど、とにかくぐしゃぐしゃにしてやろうと。だからアイディアは……。研究室の入り口のところ、あそこ小さい入り口あるでしょ。あそこに出てくる……、そういう感じでやりたいと思つて。出来が悪くて、フフフ（笑）そうですか、それはどうも恐縮でした。

川添 大学を手がけられて、これからの日本の大学はこうあってほしいとか、何かございましたら

村野 さあ、いろいろの学校の伝統があるでしょうからね、何ともいえないですけど……。ただ一般的にいえることは、壁の仕上でも何でも、陰のある建物がほしいと思う。やわらかい感じを与える、というのがいいんじゃないか。それから木を多く植えるということですね。木が育つて、陰になってくると、いくらかさこに潤いが出てきて救われるわけです。建物は少々悪くても木が補ってくれますからね。したがって、あんまり高い建物はなるべくならば建てない様に出来ないものか、なるべくならば低い建物のほうがいい。

川添 その低い建物がいいっていうのをもうちよつと……。そこいらに先生の学校に対するイメージがあると思うんですが。

村野 ……それは許されないでしょうけれども、低い建物のほうがわたしはいいと思う。というのは、圧迫したり、圧倒的な形をとったりすることを出来るだけ避けたい、というところからくる。

川添 背を低くして木を多くしてキャンパスを散らしていくということ、それも一つの、いい人間的なアプローチで非常にいいと思うんですけど、これからの大学というのはいろんな違った学部が共同して研究するとかそういうことが出てくると思う。モスクワ大学なんて、かつこうは良くないが、一つになっている。雪の多いせいもあるでしょうけど、共同して研究するのに都合がいい。そういう点で散つたりすると……。キャンパスが長くなったら矛盾する面が出てきますね。

村野 それはわたしの理想であつてね、必要性はそれにならないでしょう。集約的にするとか、コミュニケーションをお互いにしなきゃならんとかいうことになってくる。しかし、いきなりそれにはすぐならないと思う。やっぱり基本的にはハーバードみたいな、考えの基本は

そこにあるとわたしは思う。しかし敷地が許さないとか、お互いの交流のことを考えるとかでそれが許されないと。そこはやむを得ないと思う。だが、いきなりそれにはいかない、わたしは。

川添 そうなっても、先生のおっしゃるような面が生かされてこなくちゃいけないとなると……。

村野 そうなっても……。例えば、早稲田はどうかということになると、あれだけ限られた敷地で、あれだけの要求を満たすには高くないし、きや仕方がない。しかし、それは面の調子で……壁の取り扱い方で多少補っている、ということになるわけです。早稲田の研究室は高くなくておりませんが、棋のほうは、出来るだけそうしないと、ブロックのとり方とかで抑揚がつく。そのアイディアは生かされていると思う。

それはわたし終始変らんです。関西大学では、ご存じのように初期の作品というのは、大体そういう調子です。これが学生を救うことになる、ひとつの、初めにいったわたしの考え方だと。まあ建築家が自分の手法で学生に対していくらか学生の気持ちに訴える、というのはそういうことじゃないか。光線を反射する様な面のとり方をしないということですね。……いろいろ取り扱わなきゃならん問題はあっても、マッスとしての学生の心理に影響するものは、わたしなりに考えれば、ソフトな壁の取り扱い。手法はいろいろありますが、大体そういうふうにある。それから白い色を避けるということ。わたくし、関西大学は白くしましたけどね、白でないほうがいいんじゃないかという気がする。しかしわたしの頭にあるのは男の学生のことを考えてる。女子の学生るときは――甲南女子大学では白くしました。それはたとえば花を植えるとか、バラが咲くとか、みどりが多いとか

……そうすると白が一番いい。

川添 それから建築物の壁に学生たちが、ポスターを貼ったり、学生運動のスローガンを書いちゃうでしょ。きょう、拝見して、ちょっとひどいと思ったのです。

村野 それはねまさに建築家の罪です、書くようにできているからですわ。建築家に責任があると思ってる、学生にそうさせるということ。わたくしの責任ですよ。学生は悪くない。

川添 目地を深くとつてるといふ印象をあたえることは、デザインに折目を正しくというような意図がおりになると思うんですけども。

村野 わたしはよほどでないと薄くしませんね。大てい深くする。やはり、壁に陰をつけるということですね。深い目地というもののは。

川添 陰っていつても、目地は細い線をつけるに過ぎないのですから、折目が正しいというか、めりはりがある、といった印象だと思ふのです。

村野 そうですか……わたしは陰をつけるということですが、大体は面をソフトにする。大阪ビルの古い方ですね、あれは目地を斜めにつけた。そうすると陰になるから。むかしからやる手法なんです。それから目地を荒くするとか。

川添 タイルをさかさまに張ったり……。

村野 それも気どつてやるんじゃないかと、ソフトな面にしようということからです。それから目地でも粒を荒くしているところがある。ざらつとやつてる。そのまますると雨が入るから、下に強い目地をつけて、上に浅い、砂の荒いのでやつちゃう。そうするとやわらかくなりますからね。昔の建築家はみんな目地面をどうつくるかという教育を受けてますね。

川添 建築のいいとか悪いとかいうのは……きめ手というのは、もの  
とものとぶつかりあうというところが一番むずかしいですね。地面と  
建物とぶつかる足元とか……。

村野 そうです。

川添 そこで、それぞれ違ったものが時代とともに出てきたその継ぎ  
目ですね、関西大学はその点でもしらく拝見したんです。

村野 そうですか。わたしのアイデアとしては理想として持つてる  
のは……これは、まあサーリネンの建物を見て感じたことですが、ス  
トレスを、つまり強さと弱さをぶつけないで緩衝地帯をつくる。人  
間に対する建物の影響といますか、梁でも柱でも、とにかく力と力  
がぶつかるんだから、そこはしっかりしなきゃならん。そこを逆にや  
わらかくして切っちゃう。

編集部 日生劇場の角がそうですね。

村野 ええ、プロポーシオンから言っても、石であれだけ大きくなる  
から、やっぱりああしたほうが……。あれのねらいは、あそこで縁を  
切っちゃう……。ピンみたいなやり方。梁でもわたしは切っちゃう。こ  
ういう考え方ですから……。イギリスのロンドンでサーリネンがやった  
アメリカ大使館がそうですね。石で梁ができています。石の梁なのにそ  
こは金で打っているんですよ。だから非常にやわらかいです。構造を  
あらわさなきゃならんとかいうのは、我々の学生時代に習ったことで  
す。いまはそう考えなくてもよいと。何でもいいから人間に対してど  
ういう影響力を及ぼすかということ……。これで自分の手法を考え  
ていったらいいだろうと、こう私は考えているんですがね。あくまでも  
〈物が手段であって対象は人間だ〉これが一番大切だと思う。これがど

ういう影響を与えるかその建物々々によって変わるでしょうけれど、こ  
れが一番大切なことだ。その他はどんな手法を使っても、どんな材料  
を使ってもかまわない。どっちにしてもそれは手段だと考えている。

川添 たとえばサーリネンのMIT（マサチューセッツ工科大学）ね。  
ドームの講堂があつて、こっちの方に教会がありますね。こちらは屋  
根だけの建物とあちらは壁だけの建物、そういう対立で空間のドラマ  
をつくりますね。それを……もつと芸を細かくしたようなのが先生の  
作品のなかにあると思うんですよ。こっちにコンクリートのかたまり  
の講堂、あっちに丸い図書館があつたりね、そういうドラマで、先生  
は、なにを語りたかつたのか、そういうことをお聞きしたかつたんで  
すけど、どうもきょうは……。（笑）

村野 わたしは人と争つたり議論することは学生時代にはずいぶんや  
つたけど、そいつがきらいなんです。それからわたしは、宗教信者じ  
ゃないけど……一つにはそういう面があるんじゃないですか、わたし  
には。強さと弱さがぶつかるという、そういうものは避けるとい  
う。むかしからわたしにはそういうところがある。

川添 そうおっしゃるけれど、本質的には先生非常に強いんじゃないですか。  
編集部 それと学校建築というのは、どうしても予算が十分というわ  
けにはゆかないのです。失礼だけど日生劇場、もちろんあれは立派な  
作品ですけど、それとくらべれば、早稲田の文学部とか関西大学な  
んで単価が安いんですよ。何かそういうところで……。予算の少ない  
とこで本領を発揮されているように思うんですよ。どうもありがとう  
ございました。この辺で。

関西大学千里山キャンパスは、戦後約30年にわたり、建築家・村野藤吾（1891-1984）が関わってキャンパス計画が進められ、現在の千里山キャンパスに至る。通常、建築専門誌に作品が掲載される際には、計画の要点などが記されることが多いが、千里山キャンパスの全ての建物が建築専門誌へ掲載されたわけではなく、『新建築』や『建築文化』に載ったのは、千里山図書館を含む第1学舎旧1号館、専門図書館、特別講堂の3件にとどまる。村野がどのような考えで千里山キャンパスの施設をつくったのか、記されたものはそう多くない。

ここに掲載した村野藤吾へのインタビューは、(株)竹中工務店の広報誌『Approach』1965年春号に掲載されたものである。千里山キャンパスの村野の作品の多くは、竹中工務店の施工によるもので、村野独特の凝ったデザインや現場での設計変更への対応など、竹中工務店の技術力によって可能になった点も多いと思える。そんな縁もあって、『Approach』誌上に取り上げられたのだろう。

建築評論家・川添登によるインタビューの記録は、写真も含め12ページにわたる。村野藤吾の千里山キャンパスでの最初の作品は大学ホールと大学院学舎（1951年竣工）であるから、1965年ということは、村野にとつて約15年携わってきたキャンパスを語ることになる。個々の建物への思いだけでなく、段階的に建設が進められた千里山キャンパス全体についてどう考えていたのか、千里山キャンパスにおいて大切と考えたことは何だったのか、それらを知り得る貴重な資料と言える。

なお、『Approach』は、単なる企業の広報媒体にとどまらず、建築文化全般にかかわる幅広い情報発信を目的として、1964年に発刊された季刊広報誌である<sup>1)</sup>。編集は、世界に日本のデザインを発信した瀬底恒、アートディレクションはグラフィックデザイナーの田中一光、巻頭写真は建築写真の石元泰博といった、戦後日本のデザイン分野をリードする人材によって制作さ

れたスタイリッシュな誌面で、最新号2018年冬号で224号を数える。市販されるものではないため、特に古い号は入手が難しい。今回、(株)竹中工務店のご厚意により、ここへ再録することとなった。本来は、レイアウトにもこだわった誌面をそのまま再録するのが望ましいが、書籍の判型の制約もあり、本文のみを翻刻した。ご容赦願いたい。

#### インタビュー・川添登について

インタビューを担う川添登（1926-2015）は、戦後日本を代表する建築評論家である。日本を代表する建築専門誌『新建築』の編集長をつとめ、戦後の建築やデザイン分野の論調をリードし、世界の注目を浴びたメダボリズム運動のメンバーでもあった。『新建築』の編集長を1957年に辞職しているが、そのきっかけは、1957年8月号に掲載した村野藤吾設計の有楽町そごうを批判したことに新建築社社長が激怒したことであった。当時、川添は丹下健三や戦後日本の新しいデザインの潮流を擁護・推進する立場にあった。村野にとって川添は宿敵<sup>2)</sup>と憶測できなくはないが、対立関係にあったわけではないようだ。川添はこのインタビューに際し、初めて関西大学千里山キャンパスに足を運び、キャンパスの特徴や村野藤吾らしい造形に的確に切り込んでいる。

#### 村野が語る「大学建築」

インタビューでは、「大学建築」の捉え方から、出入口や外壁の目地など細部の造形に関することまで、ランダムに語られている。

#### ・多様性

まず冒頭に、川添登が第一印象として、千里山キャンパスの建物が多様性に富むことを指摘している。別の箇所では、「わりあい校舎がカチツとした……という変ですけれど。図書館とか講堂、体育館とか、どっちかというとフアンタジックな感じで、ある意味では奔放的なやり方がとられておりますね。まあ考え方によっては図書館も校舎と同じようなスタイルでもいいんじ

やないかという考えも……」と、川添はモダニスト的な考えを示しているが、それに対して村野は、特に専門図書館は、記念的な施設であることや立地条件、広場との関係で形態が決まったと述べている。造形のユニークさが強調されることが多い村野だが、工費や設計条件など、建物は実践的な側面から決まり、許される所で若干の「遊び」をまじえたことを吐露している。

#### • 外部空間

大学においては、建物だけでなく外部空間が重要だが、千里山キャンパスには中央に大グラウンドがあるものの、広場と呼べる空間はなかった。川添が、同じく村野が設計した建物がある早稲田大学のキャンパスと比較して、「いまはやりの言葉でいうと、外部空間と言うんですか、それから広場ではなくて流れというか、道というのかそういう感じで……その対照を大変おもしろく拝見したんですがね」と水を向けたのに対し、「わたしが関西大学の建築を引き受けたときは、全くそれが総合的には考えられない状態にあったわけです。というのは、敷地の買収だとか何かで、ここのとこを買って、こう埋めてこうだと、こういう状態なんですがね。……大体的見当はつけてみてもいくつか自然発生的な状態であればまとめられている。やわらかな所もある、まとまっている所もある。その中でいくらか、まあ外部空間の整理というものを考えていかないといかん」と答えている。敷地を徐々に拡張しながらのキャンパス計画で、その場所・その時点で判断し、総合的には考えられないこともあると語る。

#### • 陰のある建物

川添の「大学を手がけられて、これからの日本の大学はこうあってほしいとか、何かございましたら」との問いに、村野は「ただ一般的にいえることは、壁の仕上でも何でも、陰のある建物がほしいと思う。やわらかい感じを与える、というのがいいんじゃないか」と答えている。「陰」という語は、今日、あまりいい意味で使われないが、村野がこの語で示すのは、やわらかさ、うるおいである。千里山キャンパスで多用される掻き落としのざらつと

した壁や深い目地をもつタイル貼りの壁は、光を強く反射せず、その日の天候に応じて多様な表情を作る。「木が育って、陰になってくると、いくらかそこに潤いが出てきて救われるわけです。建物は少々悪くても木が補ってくれますからね」と、緑陰の効果にも触れている。

大学施設の良否は、「施設の充実度」はもちろんだが、キャンパス全体の「居心地の良さ」も大きな比重を占める。千里山キャンパスには「ほつとす」と言う感覚がある。大きく育った木々、緩いカーブを描く通路空間、天候や時間によって表情を変えるやわらかく多様な建物群……。村野藤吾が思い描いたやわらかな大学の風景が、今もそこに存在する。近年の充実した新施設群と共に、もうすぐ100年を迎えるキャンパスの歴史の厚みを形作っていると思える。

(1) 橋本善八、池尻豪介、杉山悦子・竹中工務店400年の夢―時をきざむ建築の文化史―、世田谷美術館、2016年、p.230

(2) 川添登インタヴュー2、中谷礼仁と鷺田めるろによるインタヴュー、2009年4月3日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

(URL: [www.oralhistory.org](http://www.oralhistory.org))

(関西大学環境都市工学部建築学科)

再録にあたって

『Approach』本誌はA4変形判、本文22字48行3段横組みで編集されているが、本文テキストのみを『年史紀要』の体裁に合わせて、縦組みで掲載した。また、明らかに誤植と分かる部分は修正した。

再録にあたっては、株式会社竹中工務店と同社経営企画室広報部 松原千春様に多大なご配慮を賜りました。記してお礼申し上げます。

(年史編纂室)